

福井の科学者

地域に根ざす科学者運動 110

2009・10

目 次

「ゆきのした史料館」を草の根文化づくりの場に
田 島 伸 浩 (1)

河川モニター活動雑感(九頭竜川)
有 賀 祥 夫 (9)

大正デモクラシーと時代の雰囲気(1)
- 大正時代と文化史からみた大正期 -
高 木 秀 男 (15)

= 新著紹介 =
西條敏美著『理系の扉を開いた日本の女性たち』新泉社
高 木 秀 男 (26)

編集後記 (29)

日本科学者会議福井支部

= 会員の著書紹介 =

書名 事例から学ぶ科学社会学

- そのとき科学者は権力・権威にどう立ち向かったか -

著 者 高木秀男
発 行 科学堂
サ イ ズ A5判上製
475ページ
発行年月日 2008年4月15日
定 価 4000円



目 次

まえがき

第1章 医学者としての森鷗外

- 第1節 むかし「脚気」という病気があった！
- 第2節 頑迷なる「秀才」が天下を取ったとき
- 第3節 医学者と文学者のはざまで

第2章 近代日本の科学技術体制

- 第1節 西洋の近代科学および技術の全面的導入
- 第2節 近代日本における科学の制度化
- 第3節 国家総動員法と戦争のための
科学・技術動員
- 第4節 日本の敗戦と日本学術会議の発足

第3章 二つの科学革命

- 第1節 十七世紀科学革命から死せる学問へ
- 第2節 二十世紀科学革命と量子論の誕生
- 第3節 科学革命と科学論

第4章 十七世紀科学革命に百年以上遅れた 化学革命

- 第1節 近代化学以前の化学
- 第2節 近代化学の立役者ラヴォアジエの登場
- 第3節 化学革命による近代化学の誕生

第5章 学問の自由と科学者の闘い

- 第1節 ガリレイ弾圧にみる科学と宗教
- 第2節 ナチズムによる人種差別と科学者の弾圧
- 第3節 現代日本における科学者弾圧

第6章 科学と社会

- 第1節 イギリスにおける魔術と科学
- 第2節 科学雑誌の変遷と社会
- 第3節 制度化されない大学と知識人

「ゆきのした史料館」を草の根文化づくりの場に

田 島 伸 浩 (ゆきのした史料館代表)

1. はじめに

ゆきのした文化協会は2001年11月に、所蔵する約2万点の資・史料を広く県民に供するため、丸岡町の元織物工場に「平和文化史料館 ゆきのした」を開設しました。

開設の目的については、本誌83号(2000年9月)に、事務局長の粟田栄が「ゆきのした平和文化資料館のめざすもの」を載せています。

また、開設以来5年間の活動と所蔵史料の概要について、本誌99号(2006年2月)に「ありのままの歴史を知り学びあうために—平和文化史料館ゆきのしたの資・史料の活用を—」と題して私が発表しました。

本稿では、それ以後の史料館の活動を報告します。

なお、開設時の名称「平和文化史料館ゆきのした」は、ゆきのした文化協会の組織を見直す課程で協会の附属施設と位置づけ、2008年4月に「ゆきのした史料館」と改称しました。



ゆきのした史料館 (坂井市丸岡町里丸岡)

2. 史料館運営の現状

1) 資・史料整理の進捗状況

1999年8月、ゆきのした文化協会は所蔵する資料を丸岡町の元織物工場に保管し、「平和文化資料館準備館」としました。そして、2001年3月末に私が気象庁を定年退職したのを機に開設へ向けての準備をはじめ、同年11月に「平和文化史料館ゆきのした」としてオープンしました。開設準備委員長を担当した私と家主の子息である粟田栄の開設までの作業のほとんどは、本箱やスチール棚の配置と資料の分別収納でした。その後、何回か配置換えを行い、資料の区分けをすすめましたが、全体的には2割程度に留まっています。

これまでに一応の分類を終えた資・史料は以下のとおりです。

『ゆきのした』バックナンバー

雑誌『ゆきのした』は1951年4月に創刊され、2004年2月で400号を数えました。2003年からバックナンバーを揃える作業に着手し、「通巻号数、発行日、ページ数、定価、記載文の特徴(特集など)」の一覧表を作成しました。同年11月の史料館開設3周年には、館内で「『ゆきのした』バックナンバー展」を行い、2号(創刊号は所蔵なし)から400号までを一挙に披露しました。

その後、バックナンバーの各号1部を永久保存とし、各号2部を閲覧用としました。閲覧用は要望にお応えしてお分けした号もあり、在庫から補充する必要があります。

次いで、各号の目次の整理にかかりました。単に「目次」を転写するのではなく、目次に載っ

ていない掲載文を抽出しますので、誌面全体を精査するため時間がかかりまだ緒についたばかりです。しかし、先人たちの汗の結晶である内容を網羅することは、将来の検索システム構築の基礎資料にもなるわけで、根気の要る作業ですがコツコツとすすめています。

空襲・戦災・戦争関係出版物

全国各地の空襲・戦災の記録集と刊行物は被災都市別に仕分けし、戦争に関する書籍、写真集、雑誌類はその脇に陳列しました。

戦時中に発行された情報誌・写真誌、軍人勅諭などの冊子、戦前の教科書類はまとめて保管し、「空襲展」の開催や貸し出しに対応できるようになっています。



空襲・戦災・戦争関係出版物コーナー
来館された福井空襲体験者に説明する筆者(右側)

福井空襲関連資料

福井空襲に関する史料は、各地・各団体主催の展示会に即応できるようにパネルを整備してきましたので、貸し出しを申し込まれる方に喜ばれています。焼夷弾や千人針などの実物史料も一目で分かる場所に保管しています。

戦争・軍隊に関連した品々

軍帽・軍靴・ゲートル・飯ごう・水筒などの品々、召集令状(復刻版)・死亡通知書・配給切符・戦時貯蓄債券・貨幣なども所定の棚に収め、いつでも閲覧できるようにしました。ただ、軍服

類は数が多く、陳列場所がないために衣装ケースや柳ごおりに収納したままで、必要な品を取り出すのに難儀しています。

地震関係資料

2008年の「福井地震展」を契機に、各種資料とその解説のパネルを整備しました。福井地震の被災写真では、当時進駐軍に在籍した日系二世のジェームス・原谷氏が撮影したカラー写真のパネル(全紙大)があります。福井地震当時にカラーフィルムが存在したことに、来館した人びとは一様に驚いています。気象庁地震調査隊が撮影した被災写真には撮影日と撮影場所が明記されています。

また、太平洋戦争下の1944年に発生した東南海地震は時の政府や軍から秘匿されてきましたが、この地震の津波に襲われた三重県尾鷲市の被災写真集が寄贈されています。地震展では、写真を拡大コピーして展示しました。また、この東南海地震では勤労働員された福井商業の生徒が殉難したことはあまり知られていませんが、その追悼の記録を所蔵しています。

1995年(平7)の阪神淡路の大震災で発行された多くの記録集・写真集を揃えています。

戦前・戦後の生活用品

館内に、戦前・戦後の生活用品をまとめたコーナーを設けました。年配の方には懐かしく、若い世代には初めて出会う品々を展示。それぞれの名称と使用方法を表示する仕事が残されています。

県内の出版物

ゆきのした文化協会会員に関わる出版物と会員以外の出版物に仕分けし、著者ごとに揃えました。ついで、文学作品はジャンル別(小説・詩・短歌・俳句・随想など)の分類に着手しています。その他の出版物(原発関連、福井空港関連、学術書など)は、どのように分類するかを思案中です。いずれにしても、細かく分類するには

それに見合った収納スペースが必要です。目下の課題は、不要不急な資料を整理し収納棚を確保することですが、満杯の館内のどこに片付けるか頭を悩ませています。

2) 運営体制

常駐体制と資料整理

史料館がいつでも、だれにでも利用できる施設であるためには、常勤体制が不可欠です。しかし文化協会のスタッフには常駐できる人間がいません。そのため当初は、毎月第三日曜日を開館日と定めて当番者を置きましたが、訪れる人が皆無な実状から休止としました。

現在は、見学や閲覧を申し込まれたときに、時間調整をしたうえで私が案内しています。資・史料整理も、開設準備の段階からほとんど私一人が行って来ました。この間、何回が行なった保管場所・陳列棚の配置換えに伴って資・史料を移動したため、どこへ保管したかが分からなくなる事態も出ています。いま、ジャンル別に仕分けし、だれにでも所在が分かるように作業をすすめています。まだ一部にとどまっています。こうした事情から、各種の照会に対して即時に資・史料の有無や内容を応えられるのは、現時点では私一人に限られています。

史料館に常駐し、資・史料の整理・分類・保管作業を行い、来館者に解説できるスタッフの確保は、当面「無い物ねだり」の厳しい現状がつづきそうです。

ホームページの更新

H・P (<http://www.yukinoshita.net/>) のアクセスは、2005 年末の 4,600 から 11,000 を超えました。残念にも担当者の多忙から 2007 年に更新がストップしました。その後担当者が降板し、善後策（簡便に更新できるシステムへの変更など）を検討中ですが、スタッフの弱小化・多忙さから先延ばしになっています。

最近、インターネット検索による資・史料の照会が増えています。それも専門的な研究材料としての求めが多くなっています。協会活動の告知はもとより、所蔵資・史料の紹介（図説）は史料館の基本活動であり、更新は待たなしと受け止めています。

「みんなでルーム」の整備

開設にあたって、本家屋に隣接する元糸繰り場のトイレを改修（車椅子使用可）し、キッチンを増設しました。壁際に本箱を置き、その上部をポスターや絵画で飾り、「みんなでルーム」と称して集会ができるようにしました。資・史料の整理やパネルづくりの作業場として用いるほか、開設記念日などの集い（講演や飲食）会場として活用してきました。しかし、不要不急の資料の置き場に窮して、いつのまにか保管場所に変わってしまいました。

人びとが気軽に集い、ミニコンサートやミニ講座を開ける会場として活用できるように、少しずつ片付けています。併せて、みんなでルームにふさわしい企画を生み出したいと考えています。

3. 史料館での展示会の開催

1) 館内で展示会を開くための空間の確保

史料館は元織物工場をお借りしていますが、家屋の広さは約 100 m²です。そこに寄贈された書棚、手持ちのスチール棚や雑多な戸棚類を配置し、資・史料を保管・展示しています。少しずつ整理をすすめています。1999 年にダンボール箱に詰めて運び込んだ資・史料の多くが手付かずのままに山積みされて、通路をふさいでいます。最近では、各家庭で置き場に困って持ち込まれる百科事典・各種の全集・雑誌類も多く、受け取ったものの置き場所に頭を悩ませています。

開設 1 年後に増築した玄関・事務室は、『ゆ

きのした』バックナンバー、中野鈴子関係史料、協会発行物を配置し、史料館のイメージアップに努めていますが、これ以上の展示・陳列のスペースは残されていません。

このままでは、整理した資・史料を分野ごとに保管・展示するスペースが確保できないばかりか、利・活用したい資・史料も埋もれたままとなります。

これまでも展示スペースを生み出すための模様替えを行ってきましたが、館の広さと資料の膨大な量との均衡がとれずにきました。それを打開しようと模様替えをしたきっかけは、「福井大地震 60 周年記念展」でした。

2)「福井大地震 60 周年記念展」



「福井大地震 60 周年記念展」
2008 年 6 月 28 日～29 日

2008 年 6 月 28 日は福井地震 60 周年記念日です。この記念日に合わせて震源地と言われる丸岡町（現坂井市）での「福井地震展」企画を想定し、その前段として 08 年に丸岡町霞の郷ホールで「福井地震展」を開催しました。会場の一隅に地震直後の避難生活のコーナーを設け、当時の生活用品を展示しました。展示のレイアウトはすっきりとまとまりましたが、宣伝力に欠けたために来場者は少数でした。

その結果を踏まえ、60 周年記念の展示会場を検討する過程で、史料館での展示会開催に思い至りました。展示スペースを確保する模様替

えを行った結果、狭いながらも地震史料と生活用品を配置できました。会場費が無料で開催費用がほとんどかからないことから、今後の館内での展示会のありように示唆を受けました。

3)「中野鈴子展」

2008 年は、ゆきのした文化協会の創立者である中野鈴子の没後 50 周年でした。史料館で展示会が開けることがわかりましたので、開設 8 周年記念日の 11 月に館内で「中野鈴子展」を開催しました。

その準備の中で、中野鈴子史料の再発見がありました。鈴子のスクラップ・ブックがその一つです。彼女は自作の詩が掲載された雑誌の切抜きをスクラップし、掲載作品をさらに推敲した書き込みをそのまま残しています。

スクラップは破損を防ぐためビニールカバーをつけ、書き込みは拡大コピーして展示しました。

また、鈴子が 1931 年（昭 6）年に発表した詩「鋤」が吉田隆子によって作曲され、翌年 3 月に築地小劇場で開かれた日本プロレタリア音楽同盟（P・M）の第 4 回プロレタリア音楽会で関鑑子によって演奏されたことは周知のことでしたが、この楽譜が出てきました。『組曲 道 ソプラノとピアノのために』（1954 年・好楽社刊）で、4 篇の詩（すべて女性）の 2 番目に組まれています。この譜面集の表紙の裏に、「中野鈴子様 吉田隆子 1954・秋」という贈呈を示すインクの文字が残されています。

なお、会員の調査で、吉田隆子が「火山灰地」で有名な劇作家・演出家の久保栄夫人であったこともわかりました。

史料館での展示レイアウトを考えると、その場で必要とする史料を探し出し、即座にパネルなどに加工して展示できる利便性を体験しました。史料館の展示スペースは限られています

が、工夫しだいで、いろいろな展示会の開催が可能なことをあらためて実感した次第です。



「没後 50 周年 中野鈴子展」
2008 年 11 月 23 日～24 日

4) 草の根文化づくりの発信基地として

ゆきのした史料館の本来の目的は、人びとが気軽に集まり、それぞれの関心事を話し合い、草の根の文化づくりを行う場所にしたいというもので、所蔵する諸資料はその手助けと位置づけています。毎年の開設記念日の集まりでは、講演や合唱を行うなど文化づくりを心がけてきましたが、まだ「みんなでつくりだす文化」運動にはいたっていません。

しかし、昨年の「中野鈴子展」と併せて開いた「鈴子を知り 学び 語るつどい」には、県外を含め 20 名以上が集まりました。鈴子の詩の朗読、紙芝居上演、オカリナ演奏など、史料館での文化づくりの糸口が示されました。館内にさらなる展示スペースを生み出し、みんなでルームを整備すれば、絵画や陶芸などの展示会、ミニコンサートなどの開催も可能です。そのための館内整備と企画の立案に着手したいと考えています。

4. 所蔵資・史料の活用と貸し出し

1) 照会と閲覧

ホーム・ページは更新されないままですが、それでも掲載された資・史料への照会が増えて

います。また毎月発行の『ゆきのした』や「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」(全国幹事として参加)の交流を通して、照会や閲覧が増えてきています。そのうちの特徴的なものを紹介します。

女流美術家奉公隊と戦ふ少年兵絵葉書

2008 年 1 月半ば、千葉大学大学院で近代日本美術史を専攻している吉良智子さんから「戦ふ少年兵」絵葉書の貸し出し依頼がありました。太平洋戦争における女性美術家の活動、特に女流美術家奉公隊という女性洋画家らのグループについて研究していて、現在博士論文を準備中とのことです。絵葉書は経年疲労で傷んでいるため、カラーコピーを送ったところ、吉良さんの論文が載っている論文集が三冊送られてきました。吉良さんの論文の一部を引用して、「女流美術家奉公隊」と「戦ふ少年兵絵葉書」を解説します。



- 上 左：兵砲一魂
作・長谷川治子
- 上中央：絵葉書の帯封
- 上 右：車体点検
作・中谷ミユキ
- 下 左：離隔操縦機
作・石田重子
- 下中央：測高機
作・平田寛
- 下 右：東京陸軍少年飛行
兵学校の食堂
作・松見秀子

女流美術家奉公隊は、1943年(昭18)2月25日、陸軍報道部の指導の下、女流美術家らによって東京で結成され、日本画、洋画、彫刻、工芸などあらゆるジャンルから集められました。

1943年9月から12月にかけて、奉公隊は「戦ふ少年兵」展覧会という巡回展を開催しましたが、その背景には戦局の逼迫によって兵力が不足していた事情がありました。1943年5月5日、陸軍省は少年兵志願年齢を一年引き下げること、国民学校卒業直後の入隊を可能にしました。軍にとって兵を集めることは、一刻を争う問題でした。注目すべきは「戦ふ少年兵」展の主たる鑑賞者が、少年兵となることが期待されている少年ではなく、彼らの母親に定められたことです。少年が兵となるには多くの場合、母親の協力が必要となります。少年兵を増員するにはまず母親に対して、息子たちを兵士にさせるようアピールすることが、最も効果的な戦略だったのです。

この絵葉書の入手経路は定かではありませんが、故雨田光平先生(彫刻家・ハープ演奏者・琴の京極流家元)からいただいた資料に入っていたのではないかと思います。無造作に陳列した史料の貴重な価値に瞠目した一例です。

中野鈴子の研究

元朝日新聞大阪本社の記者であった音谷健郎さんは、在職中に中野鈴子取材し記事にされました。退職された現在は、帝塚山学院大学の講師を勤めながら鈴子の研究をつづけられ、昨年の「没後50周年 中野鈴子展」では主として鈴子の直筆原稿を写真に収められました。その1ヵ月ほど後に、「ひたすらなる生き方—中野鈴子と詩集『花もわたしを知らない』—」の一文が寄せられました。

そして、本年3月には「加藤忠夫会長の貴重な証言を記録しておきたい。中野鈴子さんのナマの思い出をうかがいたいとの好奇心」(本人

談)から3日にわたり取材されました。

初日は史料館で『ゆきのした』のバックナンバーや鈴子関係資料をメモされ、残りの2日間は福井市米松の事務所で加藤会長へのインタビューに費やされました。取材を整理しまとめたいと言われましたので、いずれ成果を届けていただけると期待しています。



加藤会長へインタビュー。

左：加藤忠夫会長 右：音谷健郎さん

「終戦直後の福井県における文化運動」調査

2009年4月、「東京大空襲・戦災資料センター」研究員の山本唯人さんが、敦賀市での調査活動の足をのばして来館されました。山本さんは2002年にゆきのした文化協会が主催した「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議・福井大会」に出席されましたが、史料館などの見学ツアーには参加されませんでした。はじめての来館となる山本さんの調査目的は、「ゆきのした創立前後の福井における文化運動」でした。また、事前に、●1948年に国立福井療養所(通称：三方療養所)の労働組合文化部に結成された「劇団ポープ」、●福井震災の救援活動—特に北潟臨湖園を拠点とした救援活動—、●1949年の米軍兵士による婦女暴行事件(敦賀事件)などの史料提供の申し出がありました。

私の記憶にある関連史料を提示したほか、かつて「福井市史編さん室」へ貸し出し、袋ごとに分類されて返却された「戦後資料」を丸ごと

提供しました。

山本さんは朝9時から夜7時まで、ほとんど休憩も取らずにメモやコピー(約300枚)を精力的に行い、お陰で私も今まで気づかなかった史料の所在と内容を確認することができました。

翌日は、加藤会長への聞き取り、いずれ調査結果を送ってくださるとのことです。

所蔵史料が宝の持ち腐れとならず研究活動に寄与できることに、あらためて史料の整理・分類作業に意欲がわいた一日でした。

『ゆきのした』(221号)「特集・山川亮蔵」の照会

2009年1月末に、神奈川県川崎市の對馬芳(つしま・つとむ)さんから標記の照会がありました。對馬さんの郷里は福井県小浜市で、帰省した折に訪ねた「山川登美子記念館」で登美子の業績とともに弟山川亮蔵(山川亮)の存在を知ったとのこと。記念館には山川亮の資料がなかったため、Web検索したところ、標記の存在に行き着いたそうです。『ゆきのした』は毎号を国会国立図書館に寄贈していますが、對馬さんが調べたところ、この号の他にも何冊かが欠けていたため、直接の照会となりました。在庫がありましたのでおわけしましたが、この間のメール交換がご縁で5月に史料館へ来館されました。



史料館でのこんだん
(左：筆者 右：對馬芳さん)

對馬さんは永らく東京平和委員会理事を務められる一方、教科書出版の仕事をされているとお話でした。

2) 資・史料の貸し出し

最近の貸し出し依頼のほとんどは、福井空襲関連史料です。併せて戦争関連の品々を借りるケースが増えています。

高知市「平和資料館・草の家」

2008年、草の家主催の平和展に福井空襲大絵図を展示したいとの依頼がありました。2002年の「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議・福井大会」会場に展示した福井空襲大絵図に感動した館長の強い要望とのことでした。しかし、すべてを輸送するには費用があまりに高いため、縦1.8m・横90cmの3枚1組の2景のみの貸し出しとなりました。

医療生協光陽クリニック

毎年7月下旬～8月上旬に恒例となったクリニック・ギャラリーの「平和展」に、今年も協力しました。ただ、後述の福井県立図書館と時期が重なったため、例年より貸与した史料が減ったことが心残りです。

FBCテレビ特別番組「子どもたちの戦争」

昨年、福井市明倫中学校で、昭和24年から31年に在籍した生徒が夏休みの宿題で書いた作文集が41冊見つかりました。そのなかには福井空襲の体験とその後の生活が生々しい言葉で綴られています。その作文集をもとにつくられた特別番組が6月20日に放映されました。福井空襲の映像がないため、史料館の空襲関連写真を利用させてほしいとの依頼があり、番組では福井空襲を解説するナレーションのバックに提供した写真が映し出されました。また、福井空襲で投下された焼夷弾(不発弾)を現在の明倫中学生に触れさせる映像も放映されました。

福井県立図書館「語り継ぐ記憶 平和への願い」



今年の7月24日～8月30日、福井県立図書館が「語り継ぐ記憶 平和への願い」と題して、戦時下の生活を伝える本約200冊と関連する資料を展示しました。資料はゆきのした史料館が貸与した品々です。取材した朝日新聞の記事を紹介します。

...その中で目を引くカーキ色の防空頭巾(ずきん)は、空襲で亡くなった息子の遺品として、母親が半世紀以上も大切にしてきたもの。10年ほど前、ゆきのした文化協会の展示資料を見に訪れた当時70代の女性が「大事にしているものがある」と持ち込んだ。

同会顧問の加藤忠夫さん(82)によると、女性は1945年7月の福井空襲で幼い息子を背負って逃げたが、気付くと息を引き取っていたという。かぶっていた防空頭巾が唯一の形見となった。女性は風呂敷に包んだ防空頭巾を加藤さんに手渡し、「家族はもう捨てると言うが、あなた方なら気持ちが分かってくださるはず」

と話して、ほっとした表情を浮かべたという。

「もうお名前も分かりませんが、あの方のおかげで今の子どもたちが歴史の一端に触れることができます」と加藤さん。同会には数万点の資料があるが、「間違いなく一番大切な資料の一つ」という。

おわりに

ゆきのした史料館を開設して8年目を迎えます。

現状は、常駐体制の目途が立たない、資・史料の整理・分類は遅々たる状況で検索システムの構築は夢のまた夢、HPの更新も放置されたままなど、課題は山積みです。しかし、所蔵する資・史料の利・活用は、歩みはのろくとも着実に拡がり深まっています。この事実を励みに、開かれた史料館としての草の根の文化づくりの発信基地をめざして、焦らずにコツコツと積み上げていこうと考えています。

史料館の見学・閲覧を希望される場合、また資・史料の照会をされる場合は、下記へ連絡願います。

田島伸浩 自宅

電話・FAX 0776 - 73 - 0720

e-mail tazima.nobuhiro@cocoa.plala.or.jp

河川モニター活動雑感（九頭竜川）

有 賀 祥 夫（技術士・環境モニター）

はじめに

私は、長年コンサルティングエンジニアとして主に河川関係業務に携わってきた。2年前に故郷福井に帰って転機を考えていた折、市政広報で「河川愛護モニター募集（国土交通省）」を知った。地元の河川に関われることを楽しみに川歩きを始めた。それから1年間、4シーズンの九頭竜川（直轄区間）を見てきた。

入会したばかりの「日本科学者会議福井支部」で、早速7月例会の話題提供を依頼され、浅才を顧みず標題についてお話しをした。

本稿ではその中から、私が今後とも継続して見てゆきたいと思っている河口部のゴミ集積問題を中心にまとめた。そして、農水パイプライン化に伴って推進して欲しい私の願いでもある小水力発電の導入について付け加えた。

本稿は、1年間の「河川愛護モニター」活動を契機に考えたことであり、データ取得のための現地調査に基づいておらず、主観的、不正確な点があることはお許し願いたい。

1. 「河川愛護モニター」とは

河川愛護モニターとは一般に聞き慣れない言葉であるが、昭和50年から国土交通省が全国の一級河川において、個人や団体に普段の河川モニターを依頼する業務である。その内容は、日常生活の範囲内で知り得た河川に関する情報を河川管理者に提供する（「河川の状況報告」）ことと、地域の方々に対し河川の愛護や美化などについて啓発する（「河川愛護思想の普及啓発」）ことである。

1年間の活動を振り返って、意外に人影が少

なかった印象はあるが、沿川住民の方々の河川に対する関心の深さを感じた。この制度は有意義であり、その存在をもっと多くの人に知って貰いたい。また、緻密な活動が出来るようにモニターの数を増やして、相互に連携して行うことの必要性を感じた。

更に、近い将来には、河川ゴミの発生抑制のためにも直轄区間のみならず上流区間まで広げて、沿川の自主防災組織（町村単位）や各種環境保全団体との協働の基、河川モニター活動を展開したいものである。

私自身は現在、九頭竜川の左支川、日野川（直轄区間）のモニターを行っている。

2. 河口部におけるゴミ集積問題

（1）ゴミ集積の現状

平成20年7月から平成21年6月までの1年間、一級河川九頭竜川の直轄区間（河口から鳴鹿大堰、29.4km）の左右岸を河川愛護モニターとして主に自転車で見て歩いた。

そして、全国の例に漏れず、九頭竜川においても河川と海岸におけるゴミ問題があることを知った。

環境省地球環境局は、平成19年度と20年度に、国内7県11海岸をモデル地域として漂流・漂着ゴミの調査を行い、坂井市三国町沿岸もそのモデル地域に選定された。選定理由は、日本海側に突き出た地形となっておりゴミが漂着しやすいことと、東尋坊を中心とした観光地で、景観の悪化による観光・生活環境への影響が懸念される等の理由である。

調査の結果、三国町では海岸漂着ゴミの8割

以上が陸起源（河川経由）であり，その7割が県内から流出していることが分かった．

地元の NPO 団体が撮影した，降雨後の九頭竜川河口内を遊覧する観光船とその脇を流れるゴミ群の映像は，見るに堪えない光景である．

ところで，図 2.1 は九頭竜川河口部の 3.4km 地点までの平面図である．海岸から導流堤と突堤が沖に向かって大きく弧を描いて突き出ている．これは，明治 11 年（1878 年），オランダ人技師であるエッセルの設計とデ・レーケの監督指導のもとに建設した，土砂堆積防止のための導流堤と防波堤としての突堤（エッセル堤）である．このエッセル堤は国の重要文化財に指

定されている．

この図においてゴミの集積が特に顕著な箇所は，河口部左岸のマリーナ入口付近とその直上流部にあるいざき親水公園（坂井市）およびその対岸にある漁協の荷揚場一帯である．図 2.2（a）は，いざき親水公園に打ち上げられたゴミの様子である．流木，灌木，木材等の木質ゴミに混じってプラスチック類や発泡スチロール等の生活系ゴミが散乱している．

また，九頭竜川の特徴として河道内農地の存在がある．河道彎曲部の凸岸側の土砂堆積部に農地が広がっている．その脇の水辺にはヨシが群生している．ヨシ群は，治水的には低水護岸



図 2.1 九頭竜川河口部平面図



図 2.2 (a) いざき親水公園



図 2.2 (b) ヨシ群落に絡まったゴミ

を流れや波から守る働きがあり、環境の面では窒素やリンを吸い上げ水質浄化に役立ち、また多種多様な生き物を育む貴重な植物である。ヨシの再生を試みている河川もあるくらいである。

しかし、手入れが必要のようである。秋口の枯れたヨシはゴミの発生源と思える。また、水際のヨシ群落には、よく見ると多種多様のゴミが絡まっている。その一例を図 2.2(b)に示す。

貴重なヨシ群落も、現状では功罪相半ばとなっている。

(2) ゴミの挙動

ゴミの集積要因には 2 つのパターンがあるようである。一つは出水時における上・中流部からの流下ゴミである。もう一つは、高潮や冬季風浪によるゴミの吹き寄せであり、導流堤の岩陰もゴミの発生源となっている。この両者が重なったときに、河口部にとってゴミ集積被害が最も大きくなると思われる。

前項で述べたとおり、中・下流部の河道内農地や水際の枯れたヨシの存在もゴミ発生源の点で大きい。これらのゴミは年間の潮位変動の最

高点となる秋口（三国、9月）にかけて気象擾乱が加わって出やすくなる。

ところで、月や太陽などの天体の運行と地球の自転によって潮汐が生ずるが、1 年間の三国における潮汐計算（調和法）を行った。その内、年間の低潮位時期である 3 月と高潮位時期の 9 月の 3 日分を比較した図が図 2.3 である。両者の満潮位には 40cm 程の差がある。その分河川水位が上がってゴミが出やすくなると思われる。これに台風時期の洪水が加われば更にやすくなる。

次に、ゴミの吹き寄せに関係する三国の風配図を資料より図 2.4 に示す。県内全体では地形の影響を受けて特色ある分布が現れている。この中で、三国における 10 m / s 以上の強風は、統計的に西および西南西が卓越していることが分かる。

河口部の平面図に於いてこれらの条件を勘案すると、導流堤に集積されたゴミや流下ゴミは、西よりの強風と河川流との兼ね合いで、河口右岸や左岸側に吹き寄せられることが容易に想像できる。



図 2.3 潮位変動図（三国） 基準は年平均潮位

上段：低潮位時期（3月）

下段：高潮位時期（9月）

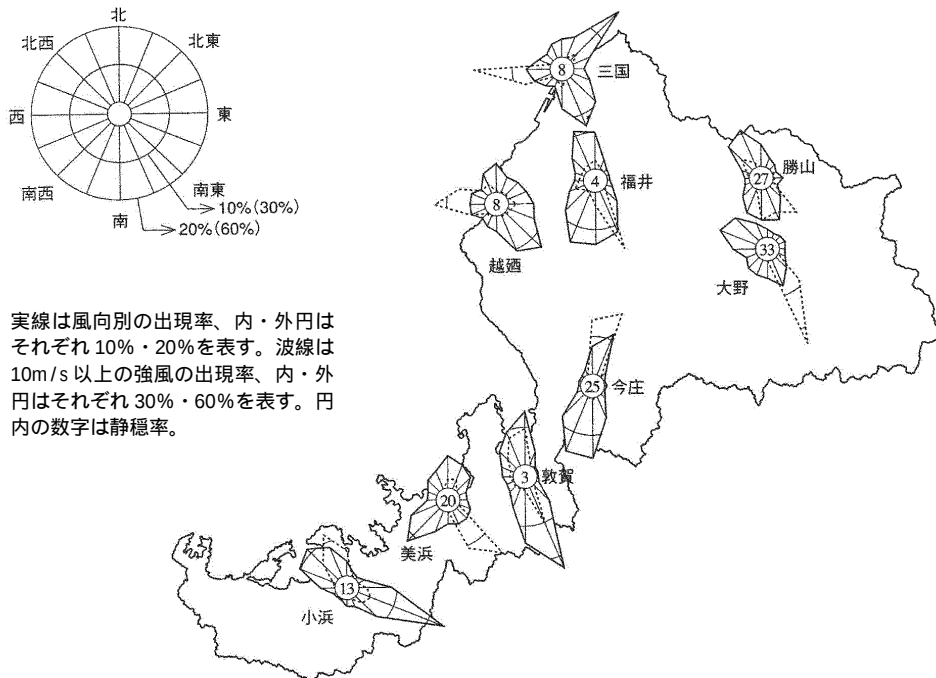


図 2.4 福井県内の風配図

出典：『福井県の気象百年』H 9. 1 福井地方気象台敦賀測候所

また、左岸側は彎曲凸岸であり、その下流側には流れの剥離による河岸沿いの渦（カルマン渦）が発達する場合もあり、ゴミが滞留すること考えられる。

ゴミ問題は、部分的な清掃活動だけでは解決が難しいと思われる。発生源対策のみならず、沿岸海洋学や河川学の分野の力を借りた、地域的なゴミの移動メカニズムの解明が重要となる。

（３）微細化ゴミの水環境問題

これまでは集積した比較的大きなゴミに注目してきたが、ここでは微細化したゴミによる水質問題に触れたい。

河口右岸側に広がるサンセットビーチの砂浜を見るとプラスチックを中心とした破片化したゴミが多く見られる。河口内のいざき親水公園の浜辺においても同様である。

微細化したプラスチックには、PCB などの

有害化学物質が高濃度に吸着されることが研究者によって指摘されるようになった。現在はゴミ問題が水環境問題に入っていることにも注目したい。

かつて私は、神通川下流部で淡水取水のための塩分濃度調査を行ったことがある。日本海の潮位変動が小さいために入退潮による混合が弱く、河口から上流に向かって海水がくさび状に侵入している様子を観測した。また、その淡塩水の境界面ははっきりしており、その境界部分に懸濁物がトラップされることを知った。九頭竜川においても同様の水理構造と思われる。

また、九頭竜川の場合、河口部容積の干満潮の差の容積に対する比率で表される滞留時間は、潮位変動が小さい分長いことが予想される。

水環境の面で不利な水理条件にあり、注意が必要に思う。

3. 農業用水利用の小水力発電

河川モニター活動において、鳴鹿大堰から取水される下流地区農業用水路にパイプライン化計画が遂行中であることを知った。農業用水も水道方式で送水され、水管理制御システムが導入されることに隔世の感がある。現在のかんがい事業には水温の問題もないとのことである。

ところで、地球環境問題がクローズアップされる中で、発電過程において炭酸ガスの排出のないクリーンな自然エネルギーとして小水力発

電がある。私は、その導入促進を願って「全国小水力利用推進協議会」に加入し、セミナーを始め見学会として全国事例を見てきた。河川モニター活動の一つの動機に小水力発電開発サイト探しがある。水の豊富な福井県としては有望なエネルギーである。隣県の富山県や岐阜県では、協議会を発足させ導入に動き出している。

小水力発電の明確な定義はないが、一般には数千キロワット以下の水力発電で、治水堰堤や農業用水路、上下水道などの小さな高低差を利

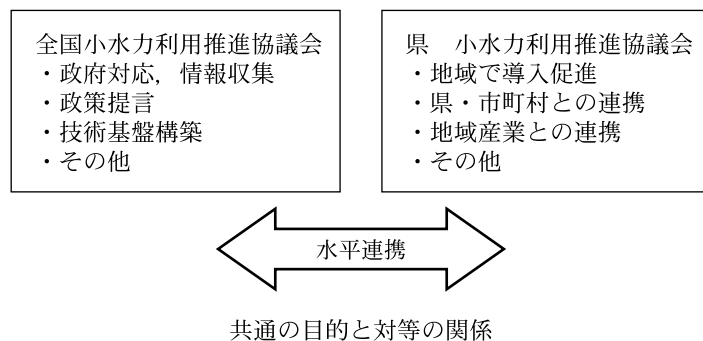


図 3.1 小水力利用推進協議会

出典：『小水力発電 最近の動向』2009. 2.28 セミナー 全国小水力利用推進協議会

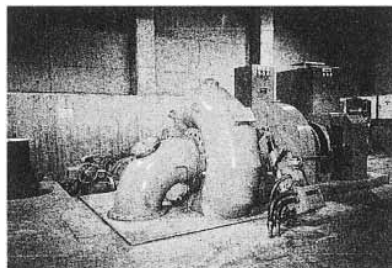
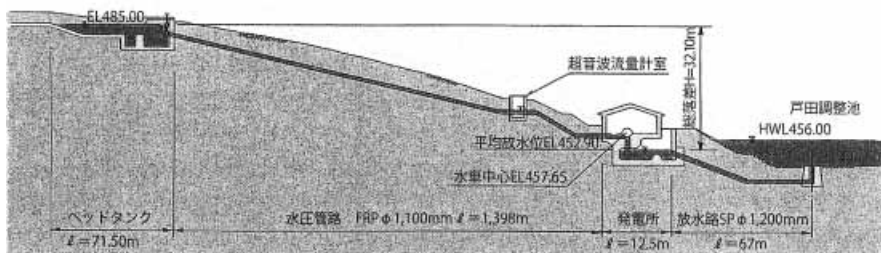


図 3.2 那須野ヶ原発電所の断面図 下段：発電所の内部

出典：『資源環境対策』Vol. 43 No. 5 (2007)

用して発電する。

九頭竜川下流地区においてもパイプライン化計画に小水力発電の組み込みや、残された開水路区間に導入する検討がなされることを期待したい。

ここでは、小水路発電に関しては本稿の目的でないため、参考までにパイプラインの遊休落差を活用した発電事業の成功例として、那須野ヶ原発電所の施設概要を示すにとどめる。

謝辞：本稿は、主として平成 20 年度の河川愛護モニター（九頭竜川）活動の際に考えた事柄についてまとめたものである。機会を与えて下さった国土交通省福井河川国道事務所に謝意を表します。

[参考文献]

- ・『河川愛護モニターの心得』国土交通省福井河川国道事務所
- ・『九頭竜川河川現況台帳附図（縮小版）』平成 19 年 3 月，国土交通省福井河川国道事務所
- ・『漂着ゴミの削減・発生抑制に向けて』平成 20 年 11 月，環境省地球環境局環境保全対策課
- ・『みくにの海から SOS』エコネイチャー・彩みくに
- ・『日本沿岸 潮汐調和定数表』平成 4 年 2 月，海上保安庁
- ・『福井県の気象百年』平成 9 年 1 月，福井地方気象台敦賀測候所
- ・「河川と海岸におけるゴミの現状と課題」金子 博，『河川』2007 年 11 月号
- ・『小水力発電 最近の動向 2009. 2.28 セミナー「熊本の川でエネルギーを作ろう」』
全国小水力利用推進協議会
- ・「農業・農村地域における小水力発電事業 - 那須野ヶ原土地改良区連合の取組み - 」星野恵美子，
『資源環境対策』Vol.43，No. 5（2007）

大正デモクラシーと時代の雰囲気 (1)

- 大正時代と文化史からみた大正期 -

高 木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

1. 「パンの会」の結成

歴史上の大正時代は、1912年7月30日から1926年12月25日までの約14年半である。長い明治時代と昭和時代に挟まれた短い大正時代は、歴史の上でもあまり重要視されずにきたきらいがあるが、一方で一部の識者のあいだでは文化史の上からも大変興味をもたれて研究されてきた。ここでは歴史上の大正時代と、その前後、発芽期・影響期を含んだ文化史的な区分としての大正期を区別しながら、大正時代、大正期という時代についてみていくことにしよう。

大正時代に活躍した人々の多くは、明治時代中期に生まれた人たちである。大正元年に29歳であった志賀直哉(1883～1971)は明治16年生まれ、ちょうど20歳であった芥川龍之介(1892～1927)は明治25年生まれである。大正期は明治期の急進的な近代化に対する反省と反抗の時期でもあった。美術評論家の東珠樹(1921～)は「明治は英雄の時代で、大正は天才の時代であった」と表現した。

文化史的にみた大正期をどう定義するか。文芸評論家の臼井吉見(1905～87)は『大正文学史』(筑摩叢書)のなかで、明治43年から昭和2年にいたる時期を大正期としている。明治43年は大正時代を代表する『白樺』(4月)、『三田文学』(5月)、『新思潮』(第二次、9月)など、反自然主義文学運動の中心となる雑誌が相次いで創刊された年である。同じく文芸評論家の中村光夫(1911～88)は『明治・大正・昭和』(新潮社)のなかで、「明治らしい明治は日露戦争で終わった」といっている。いずれに

しても明治40年代の文壇の動きをみれば、それが次の大正期につながったことは間違いなからう。

一方、大正期の終わりをどこにおいたらよいか。中村光夫流にいうなら、「大正らしい大正は関東大震災で終わった」といってもよいかもしれない。関東大震災から昭和初期にかけては次の昭和期の前史、揺籃期といえそうだからである。文学史的にみると、この時期はプロレタリア文学とそれに対抗する新感覚派文学の台頭で特徴づけられる。

また大正期は、文化史的には文学と美術が非常に接近して近代思想の消化吸収を行なった時期として特徴づけることができる。『スバル』や『白樺』に代表される文学同人雑誌が、競って西洋の近代美術を紹介してわが国の画壇を刺激したことはよく知られている。この時期、画壇では二科会や再興日本美術院、国画創作協会の旗揚げなど、洋画・日本画を問わず「反官展」の運動がさかんとなった。この「反アカデミズム」の精神こそ、大正期の精神そのものであった。

「芥川龍之介の自殺は大正期の終焉を象徴する事件であった」とする見解も一般的である。芥川が「ぼんやりとした不安」と表現したと言われている労働運動やプロレタリア階級の台頭が、大正期の終焉を意味していたからである。まだ20歳の東京帝大生であった宮本顕治(1908～2007)は、当時『中央公論』と並ぶ総合雑誌『改造』(1929年8月号)の懸賞論文に、文壇の寵児であった芥川の文学を批判した評論「敗北の文学」を投稿し、第一席となって

文壇にはなばなくデビューした。ちなみにそのときの次席は、評論家・小林秀雄（1902～83）の「様々なる意匠」であった。

第一次世界大戦によるわが国の戦時景気は、終戦後1年あまりつづいただけで、一般民衆の生活は急激に悪化し、1918年7月22日、富山県魚津町で起きた米騒動が全国に波及した。大正デモクラシーの進展や1917年のロシア革命の影響が、日本でも大正期にははっきりとあらわれてきた。1920年5月には山川均（1880～1958）らによって日本社会主義者同盟が結成され、日本最初のメーデーが行なわれ、9月には雑誌『社会主義』が創刊され即日発禁処分をうけた。翌年2月には秋田県の土崎町で雑誌『種蒔く人』が創刊され、一旦休刊したが11月に東京で第二次創刊を果たした。そして1922年7月15日には、日本共産党が結成された。

ここで大正期という時代の雰囲気や文化人の動きを知るために「パンの会」の結成と『白樺』・『青鞥』・『種蒔く人』の創刊についてみていこう。美術雑誌『方寸』を主宰していた洋画家の石井柏亭（1882～1958）・山本鼎（1882～1946）・森田恒友（1881～1933）や、詩人の木下杢太郎（1885～1945）・北原白秋（1885～1942）・吉井勇（1886～1960）ら若手芸術家が、パリのカフェのように芸術家が集まって芸術について語り合う場が必要だという考えから、「パンの会」を結成し第1回の会合を隅田川河畔で開催したのは1908年12月のことである。

無政府主義者・クロボトキン（1842～1921）の有名な著作『パンの略取』（1892年）の連想から、「パンの会」を社会主義者の集まりと誤認して、翌年5月の会合には巡查50人を動員して警戒し笑い種になったこともあった。「パン」はギリシア神話の牧神で、1894年にベ

ルリンで結成された世紀末芸術運動「パンの会」にちなんでつけられた。戦後『パンの会』（1945年）を著わした文芸評論家の野田宇太郎（1909～84）は、「パンの会は江戸から生まれた東京を、新しい巴里に変えようとする運動でもあった」と書いている。

「パンの会」の運動は新時代を象徴する文芸運動として起こったが、この時期ほかに文学者の会合がなかったわけではない。外国のサロンのような会合はあちこちで催されていた。森鷗外（1862～1922）を中心とする観潮楼の歌会、與謝野夫妻による新詩社、柳田國男（1875～1962）の家に集まった後の龍土會などがそれである。

龍土會は1903年、東京美術学校教授・岩村透（1870～1917）の主唱で琴平社と天神社の縁日に神田で会合をもった「琴天會」に端を発し、水天宮と弘法大使の縁日に変更して「水天會」となり、麻布の西洋料理店・龍土軒に会場を移して「龍土會」となった。龍土會に集まった文芸家は国木田独步（1871～1908）、柳田國男、田山花袋（1872～1930）、蒲原有明（1875～1952）、島崎藤村（1872～1943）、徳田秋聲（1871～1943）、生田葵山（1876～1945）、川上眉山（1869～1908）、小栗風葉（1875～1926）ら当時の中堅作家を網羅していた。この会合は島崎藤村が渡欧する1913年までつづいた。

野田宇太郎は「パンの会」の性格について次のように書いている。

龍土會が当時の文壇に活を入れた自然主義的作家の温床だとすれば、パンの会は新しい浪漫主義的詩人の温床として生まれたとも言える。龍土會は山の手の会であったが、パンの会は大川端の下町の会であった。パンの会の同志達はその母胎としての「明星」が頗る浪漫的な旗印を鮮明に翻した以上に、当時の

所謂日本の自然主義作家に対立した。しかしそれは仏蘭西自然主義に反対したのではなく、それにはむしろ同情を持ち、その進歩的な日本への紹介者に対しては尊敬を失わなかったが、自然主義を日本流に曲解して、味気ない平坦な散文に作り上げた作家の集団として特に早稲田文学に対しては感情的対立さえ持ったのである。それは又「明星」以来の彼等の日本文壇に於ける立場でもあった。

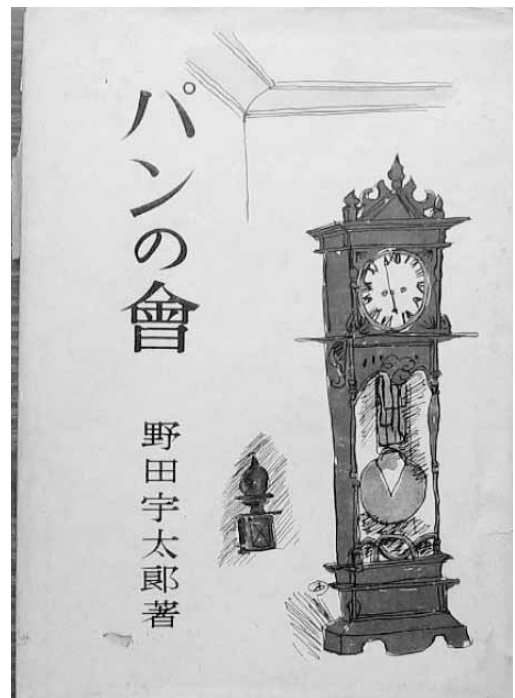
「パンの会」の最初の発起人となった面々は、石井柏亭 27 歳、木下杢太郎・北原白秋 24 歳、吉井勇 23 歳と、血気盛んな 20 代の青年芸術家たちで、いずれも『方寸』の関係者であった。木下杢太郎（本名太田正雄）は当時東京帝大の医学生で、後に東北帝大医学部教授となる。『方寸』は、当時太平洋画会に所属していた少壮画家の石井、山本、森田によって 1907 年 5 月に創刊された月刊誌である。後に画家の小杉未醒（1881 ~ 1964）・平福百穂^{ひやくすい}（1877 ~ 1933）・坂本繁二郎（1882 ~ 1969）・織田一磨（1882 ~ 1956）らが同人に加わった。

石井柏亭と木下杢太郎が出会ったのは、與謝野鐵幹（1873 ~ 1935）が主催していた新詩社である。杢太郎は『明星』に詩を発表して、新人詩人として知られるようになっていた。「パンの会」発足のきっかけは、新詩社の木下、北原、吉井、長田秀雄（1885 ~ 1949）らが主幹の鐵幹に対する不満を爆発させて脱退した後、石井亭で開かれた『方寸』の会合のなかでの話し合いであったという。1909 年 10 月「パンの会」の機関誌『屋上庭園』が発行されたが、翌年 2 月に出された第 2 号のなかの白秋の詩「おかる勘平」が風紀紊乱に問われて発禁となり、そのまま廃刊となった。

文壇の一方では、1909 年 1 月に『明星』の後継誌ともいえる『スバル』が、森林太郎（鷗外）を中心に刊行されるようになっていた。新

詩社に参加していた石川啄木（1886 ~ 1912）、平野萬里（1885 ~ 1947）、岡本かの子（1889 ~ 1939）など、ほとんどの人が『スバル』に同人として参加したばかりでなく、寄稿者に小山内薫（1881 ~ 1928）、永井荷風（1879 ~ 1959）、高村光太郎（1883 ~ 1956）、阿部次郎（1885 ~ 1934）、佐藤春夫（1892 ~ 1964）、堀口大學（1892 ~ 1981）、谷崎潤一郎（1886 ~ 1965）、和辻哲郎（1889 ~ 1960）、久保田万太郎（1889 ~ 1963）、秋田雨雀（1883 ~ 1962）、室生犀星（1889 ~ 1962）など錚々たる作家が名を連ねていた。上田敏（1874 ~ 1916）、與謝野鐵幹・晶子（1878 ~ 1942）夫妻、薄田泣菫（1877 ~ 1945）、蒲原有明は客員の指導格であった。

そして 1910 年に、『白樺』『三田文学』『新思潮』（第二次）がつぎつぎと創刊されたのである。『白樺』は学習院卒の文学青年たちによって発刊された雑誌であり、芸術至上主義と人道主義を旗印とし、大正期文学の主流となる。『三



田文学』は、慶応義塾大学の文学部に迎えられた永井荷風が三田文学会をつくり、その機関誌として発行されたものである。当然、先行した『帝国文学』『早稲田文学』に対抗する意味もあったに違いない。また『新思潮』は東京帝大系の雑誌で、谷崎、和辻、画家の木村壮八(1893～1958)らが同人であった。

さて「パンの会」は、1910年11月20日、この年創刊された前記の3誌に『スバル』を加えた4誌合同のパンの会を開催した。このときの様子は谷崎が「青春物語」に書いており、木村壮八は油彩作品に描いている。多くの人が集まったこの会では、「黒杵事件」と呼ばれる有名な事件が起きた。この会は長田秀雄・柳敬介両名の入営送別会をかねて開かれたのだが、高村光太郎が「祝長田秀雄君・柳敬介君之入営」と書いたピラに黒杵をつけて会場に張り出した。これを見た萬朝報の記者が、これは徴兵制度に対する批判であると社説などで2日間も攻撃し

たのである。そのため長田は入営してから非国民として虐待されたという。大逆事件の裁判をひかえていた時期でもあり、黒杵事件以後は「パンの会」の活動も次第に盛り上がりを欠くものになっていったという。

2.『白樺』の創刊

「パンの会」を背景とした『スバル』は、パンの会の消滅とともに影の薄い存在となり、1913年12月、通巻60冊をだして終刊となった。『スバル』より1年遅れて誕生した『白樺』は、このころから全盛期を迎えようとしていた。実は『白樺』が出る前に、学習院の同級生が集まって作っていた雑誌が3種類あったが、それらが合同して『白樺』が誕生したのである。

1906年、この年に文学好きの武者小路実篤(1885～1976)、正親町公和、志賀直哉、木下利玄^{としはる}(1886～1925)が学習院を卒業して東京帝国大学に進んだが、翌年、毎月創作を書



学習院

いて読み合わせる会をはじめた。これが原稿を綴じて回し読みをする回覧雑誌『白樺』という形になったのが、1908年のことである。回覧雑誌『白樺』がいつまで続いたかはっきりしないが、その後、4人が回覧雑誌『暴矢』を出し、それが『望野』に改められたという。

1908年10月、有島武郎(1878～1923)の末弟である里見淳(本名・山内英夫)(1888～1983)ら7名のグループで回覧雑誌『麦』が出され、月2回の発行で1年間つづいた。1909年には、柳宗悦(1889～1961)と郡虎彦(1890～1924)によって回覧雑誌『桃園』が出されたが、これは2号で終わってしまった。そのころ『望野』『麦』『桃園』の3誌を合同する話が持ち上がっていたからである。そして創刊の準備のため、3誌の同人たちが毎月4円のお金をだして積み立てることになった。北海道帝国大学予科教授の有島武郎は、月々5円送ってきてみんなを喜ばせた。こうして1年後の1910年、月刊雑誌『白樺』が誕生することになった。

『麦』同人のうち、中村貫之、田中治之助、菅田敏光などが去り、有島武郎・有島生馬(1882～1974)兄弟が同人に加わった。遅れて長與善郎(1888～1961)、岸田劉生(1891～1929)、倉田百三(1891～1943)、千家元麿(1888～1948)、後の総理大臣・犬養毅(1855～1932)の三男・犬養健(1896～1960)ら加わった。そして白樺群像のまわりには高村光太郎、画家の梅原龍三郎(1888～1986)・津田青楓(1880～1978)・木村壮八、陶芸家の富本憲吉(1886～1963)・バーナード・リーチ(1887～1979)など多数の美術家を取り巻いていた。

1900年ごろは日本の郵便事情、とりわけ葉書をめぐる環境が大きく変化した時代であった。葉書そのものは1873年に制度が導入されたが、

1899年12月から年賀状の元日配達という特別制度がはじまった。また、私製葉書の発行が認められたのが1900年10月であり、以後、民間業者による「絵はがき」が流通することになった。特に、日露戦争以降は軍事郵便と記念絵葉書の消費量が飛躍的に増大して流行現象を呈した。第一次共産党事件(1923年6月5日)で逮捕された堺利彦(1871～1933)らは、差し入れられた絵葉書を使って獄中で展覧会を開いたという記録が残されている。

また『志賀直哉宛書簡集・白樺の時代 - 』(岩波書店)をみても、「絵はがき」の利用の多さに驚かされる。葉書に自分で絵を描いているものも少なくない。これはもちろん「白樺派」が示した絵画への興味と無関係ではないが、当時の「絵はがきの時代」を背景としたものであることは間違いない。

また大正末から昭和10年代は高等教育機関が爆発的に増加した時代であった。1900年には大学はまだ東京と京都の二帝大だけで、大学生の総数は3,240人にすぎなかった。それが1925年には大学34校で、学生は46,700人となった。明治30年代後半から高等専門学校の新設も本格化し、さらに1918年の「大学令」を中心とした高等教育機関の拡張方針が打ち出され、多くの高等専門学校が大学に昇格、慶応や早稲田など多数の私立大学も制度上はじめて大学と認められることになった。大学として認められるということは高等文官試験の予備試験が免除されるということであった。1930年には大学46校、高等専門学校111校、実業専門学校51校、これに高等学校生徒を含めた高等教育人口は18万人となり、1940年には25万人に達する。

ただし学習院は文部省ではなく宮内省の管轄校で、華族の子弟はここで学ぶことになっていて、授業料は無料であった。士族・平民でも入

学は可能であったが、こちらは授業料を必要とした。学籍簿には華族，士族，平民の族籍が記載され，士族と平民は絶対的少数派であったが，差別はなかったという。志賀直哉は6歳で学習院予備科6級に入学したが，19人の同級生のうち士族は直哉を含めて2名，平民が2名，北白川宮という皇族が一人いて，他の14名は華族であったという。

学習院は宮内省の管轄であったため，独自の方針と校風をもつことが可能であったわけで，当時ある意味ではもっとも自由な校風の学校であった。学習院出身者が中心となった『白樺』は，大正時代を象徴する雑誌に生長し数々の作家を世に送り出した。ただし『白樺』は学習院では「禁書」とされた。一方『白樺』の人たちも『白樺』が学習院の校風と思われて困る，学習院はもっと武張っていると，ことあるごとに強調した。

表1に見られるように，学習院の院長には軍人が多く就任していることがわかる。陸軍大将

の乃木希典（1849～1912）は1907年に明治天皇より裕仁親王（後の昭和天皇）の教育係りを命じられ，学習院院長に就任し，寮に住み学生とともに寝起きした。常に学園を見回り細かいところまで規律を守るように学生・生徒に注意したので，学生たちにはまったく人気なかったという。

『白樺』の同人たちは，みんな例外なく軍人嫌いであった。学習院院長も務めたことがある乃木希典が殉死したとき，27歳であった武者小路実篤は，『白樺』の後記に，「乃木大将の殉死はある不完全なる時が自然を悪用してつくり上げたる思想にはぐくまれた人の不健全な理性のみが，讃美することを許せる行動である」と書いた。29歳であった志賀直哉も，「乃木さんが自殺したというのを英子^{ふさこ}にきいた時，『馬鹿な奴だ』という気が，丁度下女かなにかが無考えに何かした時感ずる心持と同じような感じ方で感じられた」と日記に書いた。

表1 戦前における歴代学習院院長一覧

代	氏 名	就 任 時 期	備 考
初 代	立花 種恭	1877年～1884年	三池藩第8代藩主，子爵
第2代	谷 干城	1884年～1885年	陸軍中将，子爵
第3代	大島 圭介	1885年～1887年	枢密顧問官，男爵
第4代	三浦 梧楼	1887年～1891年	陸軍中将，子爵
第5代	岩倉 具定	1891年	宮内大臣，公爵
第6代	田中 光顕	1891年～1894年	陸軍少将，内閣書記官長，宮内大臣，子爵
第7代	近衛 篤磨	1894年～1903年	貴族院議長，公爵
第8代	菊池 大麓	1903年～1904年	京都帝国大学総長，男爵
第9代	山口鋭之助	1905年～1906年	京都帝国大学教授，物理学者
第10代	乃木 希典	1907年～1912年	陸軍大将，伯爵
第11代	大迫 尚敏	1912年～1918年	陸軍大将，子爵
第12代	北条 時敬	1918年～1921年	宮中顧問官
第13代	一戸 兵衛	1921年～1923年	陸軍大将，教育総監
第14代	福原鎌二郎	1923年～1929年	東北帝国大学総長
第15代	荒木寅三郎	1929年～1937年	京都帝国大学総長
第16代	野村吉三郎	1937年～1939年	海軍大将
第17代	山梨勝之進	1939年～1946年	海軍大将

乃木の殉死の現場を検分して遺体を拝し、遺書を読んだ軍医総監・森林太郎(鷗外)の態度は、当然のことながら違っていた。乃木は鷗外が小倉の第十二師団軍医部長に左遷されたとき、新橋駅まで見送りに来てくれた唯一人の高官であった。鷗外は乃木の殉死に触発されて、殉死をテーマにした「奥津弥五右衛門の遺書(初稿)」を僅か4日で書き上げ、『中央公論』1912年10月号に発表した。

この一作は文学者・森鷗外に新しい境地を開くことになった。実際、以後3年のあいだに、彼は「阿部一族」「佐橋甚五郎」「護持院原の敵討」「大塩平八郎」「堺事件」「安井夫人」「栗山大膳」「山椒太夫」「津下四郎左衛門」「魚玄機」「ぢいさんばあさん」「最後の一句」「高瀬舟」「寒山拾得」と、14編もの歴史小説を書いた。これら歴史ものの執筆は、鷗外の代表作となる陸軍医務局長退官後の考証3部作「澀江抽齋」「伊澤蘭軒」「北条霞亭」につながっていったのである。

3.『青鞥』『種時く人』の創刊

「元始、女性には実に太陽であった。」という有名な創刊の辞を載せた、若き女性たちだけによって作られたわが国最初の雑誌『青鞥』が出版されたのは、1911年9月のことである。発起人は日本女子大出身の平塚らいてう(はるこ)(1886～1971)、保持研子(やすもち よしこ)(1885～1947)、木内錠子(ていこ)(1887～1947)、中野初子(1886～1919)と、東京帝大教授で国学者・物集高見(もづめ)(1847～1928)の娘・物集和子(1888～1979)の5人であった。物集和子は、平塚の同級生であった姉が結婚で抜けたため代わりに参加した。雑誌発行には翻訳家の生田長江(1882～1936)の勧めと平塚の母の援助があったという。

また5人のまわりには、賛助員として小説家

の長谷川時雨(1879～1941)、東京美術学校教授・岡田三郎助(1869～1939)の夫人で小説家の岡田八千代(1883～1962)・與謝野晶子、森鷗外夫人の森しげ子、森鷗外の妹で東京帝大医学部教授・小金井良精(1859～1944)の妻・小金井喜美子(1870～1956)、国木田独歩の夫人・国木田治子(1879～1962)、小栗風葉の夫人・小栗かず子など、錚々たる女性が活動に共鳴して援助した。

そして創刊当時、社員として『青鞥』に参加した人が、発起人を除いて野上八重子(弥生子)(1885～1985)ら18名もいた。後には神近市子(1888～1981)や伊藤野枝(1895～1923)が参加した。創刊号の挿絵を描いた長沼智恵子(1886～1938)は、後の高村光太郎夫人である。平塚らいてうの夫で画家の奥村博史(1891～1964)も表紙絵を描いた。

雑誌名の「青鞥」は、「ブルー・ストッキング」からきている。ブルー・ストッキングとは、18世紀半ばころロンドンのモンタギュー夫人のサロンに集まって、さかんに芸術や科学を論じた婦人たちが、黒いストッキングが普通であった当時青い靴下はいていたことから、何か新しい、女らしくないことをする婦人たちを嘲笑する意味で使われた言葉だという。女性だけで作られた雑誌『青鞥』の創刊は画期的なことであったので、創刊当初よりマスコミにも注目されたが、看板とされた「新しい女」のキャッチフレーズが、逆に興味本位のスキャンダルの材料にされた。

『青鞥』というと、どうしても婦人解放運動と結びつけて考えがちであるが、当初は女流文学の奨励をめざした雑誌であったという。『青鞥』を婦人運動、社会運動にかりたてたのは、後に富本憲吉夫人となる尾竹紅吉(一枝)に代わって伊藤野枝が編集部員に加わったことによる。『青鞥』1913年1月号は「新しい女、その

他婦人問題」を付録につけ、2月号には社会主義者・福田英子(1865～1927)の「婦人問題の解決」という論文を載せた。このため2月号は当局により発禁処分を受けた。

そして創刊2周年を迎えた1913年9月号には、ふたたび婦人問題の特集を行なった。それには伊藤野枝の夫・辻潤(1884～1944)が翻訳した、アナキストのエンマ・ゴールドマン(1869～1940)の「婦人解放の悲劇」、社会思想家・エレン・ケイ(1849～1926)の「恋愛の進化」、性心理学者・ハベロック・エリス(1859～1939)の「女性に於ける性的顛倒」などという論文が掲載された。1915年から伊藤野枝が『青鞥』の編集権を引き継ぎ、婦人問題の研究雑誌という性格を鮮明にしたが、翌年2月号で廃刊となった。

東洋大学の近く、本駒込一丁目の南天堂書房の二階が当時「レバノン」という喫茶店になっていた。そこに小野十三郎(1903～96)、赤松月船(1897～1997)、岡本二一(後の東京タイムズ社長)ら自ら「白山詩人」と称する詩人の卵たちや、生田長江の門下生、佐藤春夫、高村光太郎、室生犀星、野口米次郎(1875～1947)ら、それに平塚らいてう、市川房枝(1893～1981)といった婦人運動家など一風変わった人物があつまっていた。

そして文学青年で『文章世界』の編集部員をしていた藤原敬二(1899～1983)、すなわち後に陶芸部門の重要無形文化財保持者(人間国宝)となる藤原啓もその一人であった。彼は39歳になって初めて陶芸の道に進むまでは、放浪の詩人で小説なども書いていた。放浪中に彼は正宗白鳥(1879～1962)坪内逍遙(1859～1935)、西條八十(1892～1970)、安部磯雄(1865～1949)、荒畑寒村(1887～1891)、林芙美子(1903～51)をはじめ、実に多くの人物と交流をもった。

「レバノン」で知り合った婦人運動家たちが婦人参政権獲得同盟を結成したのは、1923年1月のことである。彼女たちはしばしば街頭デモを行なったが、いつもその出発地はたまり場の「レバノン」であった。ある日のデモのとき、時たま南天堂書房にきていた藤原敬二はデモの旗持ちを頼まれ、「婦人に参政権を」と大書した旗をかついでデモの先頭に立ったという。社会主義運動に共鳴して活動したこともある彼は、魅力的な平塚らいてうに頼まれ嫌とは言えなかったという。しかし男は3人しかいなく、他は女性が2、30人で、後で店の常連から散々冷やかされたという。そんな彼が、郷土の岡山県に帰り全く未経験の陶芸に取り組み、苦勞のすえ人間国宝になるのだから世の中は面白い。

さて1919年には、『我等』(2月)、『改造』(4月)、『解放』(第一次)(6月)といった総合雑誌が次々と誕生した。大阪朝日新聞社にいた長谷川如是閑(1875～1969)が、大山郁夫(1880～1955)らと自分たちだけの言論機関(雑誌)を持とうということではじめたのが『我等』であった。『我等』は、吉野作造(1878～1933)の民本主義をモットーとして、デモクラシーの普及・啓蒙を編集方針とした。

『改造』は、山本実彦(1885～1952)が「文化運動を通じ社会改造に寄与する」ことを使命として創刊した。当時の有力総合雑誌『中央公論』に対抗し、社会主義的急進論者なども執筆者に加え、時勢を機敏に反映させ紙面の新鮮さをねらって編集された。創刊号には幸田露伴(1867～1947)の大作「運命」が載ったが、人気作家の作品を掲載するために原稿料のつり上げを行なった。

『解放』(第一次)は、吉野作造、医師の福田徳三(1874～1930)、大山郁夫らの黎明会の機関誌的な総合雑誌として大鑑閣から出された。実際の編集には黎明会と関係の深かつ

た東京帝大新人会の赤松克麿 (1894 ~ 1955), 佐野学 (1892 ~ 1953), 宮崎龍介 (1892 ~ 1971) らが参加したが, 1920 年 6 月号以降は, 麻生久 (1891 ~ 1940), 山名義鶴 (1891 ~ 1967) らが結成した解放社が編集業務を行なった。大正デモクラシー擁護の立場から様々な社会問題をとりあげたが, 次第に急進的自由主義から社会主義へとシフトしていった。

社会問題では荒畑寒村, 堺利彦, 山川均, その妻の山川菊栄 (1890 ~ 1980), 石川三四郎 (1876 ~ 1956) などが執筆した。文芸欄の顧問には島崎藤村を迎え, 当時の人気作家に執筆を依頼したほか, 広津和郎 (1891 ~ 1968), 宇野浩二 (1891 ~ 1961), 宮地嘉六 (1884 ~ 1958), 金子洋文 (1893 ~ 1985), 小川未明 (1882 ~ 1961) などを発掘した。しかし関東大震災で大鑑閣が全焼して事実上倒産したため, 1922 年 9 月号をもって廃刊となった。

1921 年, 仏文学者・小牧近江 (本名・近江谷駒^{こまぎ}) (1894 ~ 1978) 新聞記者の金子洋文 (本名・金子吉太郎), 活動弁士の今野賢三 (1893 ~ 1969), 詩人の山川登美子 (1879 ~ 1909) の弟・山川亮 (亮蔵) (1887 ~ 1957) などによって, 秋田県土崎町でプロレタリア文学雑誌の先駆けともみなされる『種蒔く人』(土崎版) が出版された。部数 200 部, 18 ページの薄い雑誌であった。金子と今野は小牧の土崎小学校の同級生である。

小牧の父・近江谷栄次は国会議員で, 近江を外交官にしようと考え外国語はフランス語で教育する暁星中学にいれ, その後フランスに留学させた。近江はフランス大使館でアルバイトをしながらアンリ 4 世校, ソルボンヌ大学で学んだ。留学中に第一次世界大戦が勃発して苦労したが, 戦争の悲惨さ・無意味さを身をもって体験した。

パリ留学中に小牧はいろいろな人物と知り

合ったが, 画家の藤田嗣治 (1886 ~ 1968) もその一人である。藤田嗣治は森鷗外^{もりおう}の後に陸軍軍医総監になった藤田嗣章^{つぐあきら}の息子で, 暁星中学の同窓でもあった。藤田嗣章は息子のパリ行きを鷗外に相談したところ, やはり東京美術学校だけは出ておいたほうがよいと進学を勧めたので, 嗣治は東京美術学校に進学した。しかし嗣治の成績は著しく悪く, 特に主任教授の黒田清輝 (1866 ~ 1924) とは馬があわず, 彼の卒業制作は悪いと名指しで批判されたという。

藤田嗣治はパリに行って後に有名画家として活躍することになるが, 第一世界大戦が始まり, パリにいた日本人にも退去勧告が出されるような状況になったとき, パリの大使館でアルバイトをしていた小牧と出会っている。小牧はそのとき好戦的な日本の陸軍中佐に対して一歩も引かぬ藤田の毅然とした態度を目撃した。嗣治は「パリに留まるにはどうしたらよいか」と執拗に質問を繰り返した。そして「そうまでしてなぜパリに留まりたいのか」という中佐の問いに「ただ絵が描きたいだけだ」と嗣治は答えた。陸軍軍医総監を父に持つ嗣治は, 軍人など恐れるに足らんという気持ちがあったのかもしれない。

大戦が終わりヴェルサイユ講和会議の際には, 小牧は大使館より手伝いを要請され全権主席の西園寺公望 (1849 ~ 1940) や吉田茂 (1878 ~ 1977), 重光葵^{まもる} (1887 ~ 1957), 松岡洋右 (1880 ~ 1946) らを知った。そして吉田が帰国の旅費を工面してくれたので, 彼は 10 年ぶりに帰国することにした。帰国の途中, 彼はスイスのフランス語使用地区青年平和運動者会議に出席し, 小冊子『第三インターナショナル - 原理 - 第 1 回大会』を入手した。この小冊子はその第 1 回の記録とレーニン (1870 ~ 1924) のテーゼが掲載された貴重なものであった。

これをもとにして小牧は, 後に『種蒔く人』

に「恩知らずの乞食」という題で第三インターナショナルの紹介文を書く。その文章は第三インターを日本に最初に紹介したものということで、『種蒔く人』が日本プロレタリア文学運動の嚆矢と呼ばれるようになる所以となった。

そしてその日の午後、小牧はドマン社を訪れた。ロマン・ローラン(1866～1944)や近江と親友であったジャンが執筆した雑誌『ドマン』は1918年10月をもって休刊となっていたが、創刊号から30号までの全冊を彼に無料で提供してくれた。これこそ『種蒔く人』の手本のなった雑誌である。この雑誌を携えて彼は1919年12月24日、神戸に着いた。

『種蒔く人』の創刊は、小牧がフランス留学中に影響を受けたバルビュス(1873～1935)のクラルテ運動を日本で普及するためであった。クラルテ運動とは、バルビュスの小説『クラルテ』(1919年)のテーマである戦争放棄、人類融和の思想を、世界の思想家や芸術家の連帯

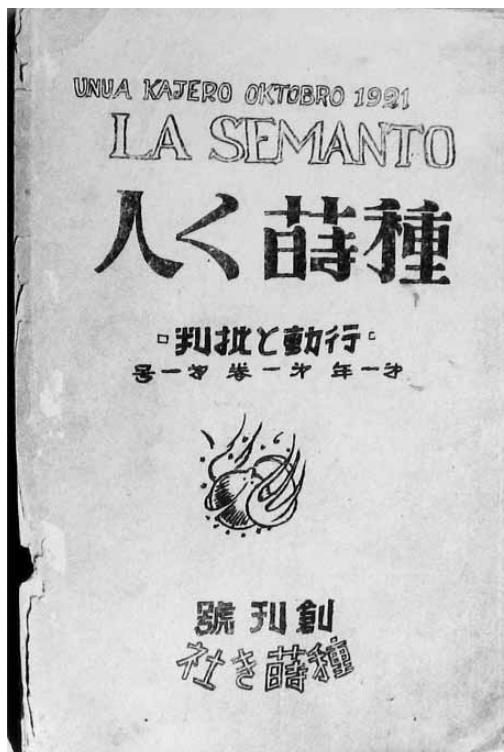
で広げてゆこうという運動で、賛同者にはアナトール・フランス(1844～1924)、ロマン・ローラン、バーナード・ショウ(1856～1950)、アインシュタイン(1879～1955)など、有名人が名前を連ねていた。

『種蒔く人』は資金難のため3号で休刊となったが、1921年10月、東京で『種蒔く人』(第二次)が創刊され、同人に佐々木孝丸(1898～1986)、平林初之輔(1892～1931)、青野季吉(1890～1961)、前田河広一郎(1888～1957)、柳瀬正夢(1900～45)、中西伊之助(1887～1958)らが加わった。創刊号の表紙には特別寄稿家の名前がずらりと並び、その顔ぶれの豪華さにまず驚かされる。その顔ぶれとは次のような人びとであった。

有島武郎、江口渥(1887～1975)、藤森成吉(1892～1977)、長谷川如是閑、平林初之輔、神近市子、宮島資夫(1886～1951)、小川未明、武者小路実篤、山川菊栄、吉江喬松、秋田雨雀、バルビュス、イギリスの社会主義者・エドワード・カーペンター(1844～1929)、ロシアの盲目の放浪詩人・エロシェンコ(1890～1952)、アナトール・フランス。

しかし苦勞してようやく出版された創刊号は、書店のどこを探しても見つからなかった。店員に聞くと先ほど発禁となったという。発禁の理由は、種蒔き社の宣言文と巻頭に載せられた「思想家に訴ふ」であった。『種蒔く人』は1921年12月号(3号)も1922年1月号(4号)も発禁となり、つづく9月号(12号)、11月号(14号)も発禁となった。

『種蒔く人』(第二次)は1923年9月の関東大震災まで継続刊行され、世界主義文芸雑誌として、「行動と批判」をモットーに国際主義、労農ロシア支持、反戦平和の精神を貫き通した。大震災は『種蒔く人』の刊行を挫折させ、一方では『白樺』の発行を不可能にした。『白樺』



の再刊ができなかったことは、『白樺』が一応
その使命を果たし、その役割を終えたことを意
味していたとも言える。関東大震災のあった年
の1月、菊池寛(1888～1948)によって『文
藝春秋』が創刊され、彼は文壇のボスへと上り
詰めていくことになる。

つづく(参考文献は最後にまとめて示します。)

= 新著紹介 =

西條敏美著『理系の扉を開いた日本の女性たち』新泉社

高 木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

著者の西條敏美氏は徳島県立中央高等学校の教諭で、日本科学史学会や日本理科教育学会などで活躍し、『徳島科学史雑誌』を主宰する著名な研究者である。著書も『虹 - その文化と科学 - 』(恒星社厚生閣)、『物理定数とは何か』(講談社ブルーバックス)、『理科教育と科学史』をはじめ多数にのぼる。

今回出版した本は、以前に出版した『西国科学散歩(上)(下)』(裳華房)、『東国科学散歩』(裳華房)の姉妹書ともいべき本である。戦前においては女性が科学者になるのは制度的にも非常に難しい状況にあった。著者はそんな中で困難にもめげず理系の科学者として新たな道を切りひらいた人々の足跡を全国各地に直接おとずれ 雑誌『心とからだの健康』(健学社)、『S & T (科学技術) ジャーナル』(科学技術広報財団)、『ミクロスコピア』(ミクロスコピア出版会)に連載し、それらをまとめて今回出版したのである。

著者が取り上げた女性は以下に示す 25 名で、現在活躍している人は含んでいない。

四十代から地域医療に貢献した医師

	野中 婉女 わたらい そのじょ
眼科医で俳人でもあった女医	度会 園女
蘭学塾の慈母	緒方 八重
西洋医学を初めて修得した女医	楠本 イネ
先駆的助産婦	津久井 磯
日本の保母第 1 号	豊田 英雄子
公許女医第 1 号	荻野 吟子
公許女医第 3 号	高橋 瑞子
産婆学校を創設した助産婦	村松志保子
日本最初の看護婦	大関 和



日本最初的女子留学生	津田 梅子
公許女医第 2 号	生沢 クノ
日本初の眼科女医	右田 アサ
東京女医学校を創設した女医	吉岡 彌生
世界初のナイチンゲール記章受賞者	萩原 タケ
初めてドイツで医学博士号を取得した女医	宇良田 唯 ^{ただ}
日本初的女子帝大生	丹下 ウメ
日本初の女性博士	保井 コノ
日本初的女子帝大生	黒田 チカ
日本初の女性農学博士	辻村みちよ
主婦学者	加藤 セチ
栄養学者	香川 綾

ハンセン病患者救済に尽くした女医

小川 正子

日本女性初の国際的物理学者

湯浅 年子

数学で日本初の女性理学博士

桂田 芳枝

著者は、数学者の桂田芳枝を除くすべて女性科学者のふるさとなど現地を訪れて紹介記事を書いており、そのため写真も多数掲載されている。この本は優れた紀行エッセイであると同時に、役に立つ案内書にもなっている。女医が沢山取り上げられているが、理学博士や農学博士も含まれている。読者は25人のうち果たして何人の方をご存知だろうか。私は現在『近代日本の教育政策と科学技術体制 - 学問の自由と科学者の社会的責任 - 』という仮題で本原稿を書いているが、その中に登場する女性がこの25人のなかに5人含まれていたもので、参考に使わせていただいた。

ただし西條氏のこの本は先駆的な女性科学者の顕彰という観点で書かれているので、対象となった女性の積極面だけが前面に出されている。もし一人の女性科学者に着目して伝記を書く場合には、その女性の全側面を調べて書くことになるから、当然欠点や弱点にも触れることになる。だから、同じ女性を対象にしても取り上げ方によって記述の内容はかなり異なってくるのはいた仕方がない。

たとえば吉岡彌生の項には、医者の娘として生まれた彼女が女医となり、苦勞して女性のための医学校、東京女医学校を創設して現在の東京女子医科大学の基礎を築いた功績について触れられている。私の原稿で吉岡に触れた箇所では、次のように書かれている。

1941年9月6日 文部省は抜き打ち的に「学生生徒卒業期繰上二関スル件」と題する内報を専門学務局長名で各大学、高校、高等専門学校に送りつけた。これに怒った平賀東京帝大総長は再考をうながす意見書を二度も提出したが完

全に無視されてしまった。そして日米開戦が不可避となって近衛が政権を投げ出した1941年10月16日、大学・高等学校・専門学校の修業年限を当分のあいだ、それぞれ半年以内で短縮できるという勅令が公布された。1942年3月の大学・専門学校卒業者は12月に卒業させ、ただちに徴兵検査を行なうことがきまり、11月1日には文部省令で、大学・高校・専門学校の年限をそれぞれ半年短縮することが決まった。

そして卒業するものは何らかの職を持たなければ、軍に徴用されることになった。東京薬学専門学校（現・東京薬科大学）では、学生をA、B、C、Dの4つのグループに分け、Aは大学の研究室に、Bは国立の研究所に、Cは製薬会社の研究室、Dは薬局等に応募するように指示した。当時この学校にはマルクス経済学者・野呂栄太郎（1900～34）の妻・塩沢富美子^{ふみこ}が卒業を間近にひかえていた。

塩沢富美子は1934年に夫を獄中で失ったあと、遺児をかかえ経済的にも自立すべく医師をめざして東京女子医学専門学校の校長・吉岡彌生（1871～1959）に村尾圭介博士の紹介状をもって面会した。しかし、彼女に治安維持法による検挙歴があることを知り、吉岡はきっぱりと入学を断った。

吉岡彌生は済生学舎（現・日本医科大学）に学び1892年に内務省医術開業試験に合格し、日本で27番目の女医となった。ところが1900年、済生学舎が風紀の乱れを理由に女性の入学を拒否したことを知り、女医を養成する学校をつくる決意をして同年12月5日、日本初の東京女医学校を設立したのである。同校は1912年に東京女子医学専門学校（現・東京女子医大）に昇格し、1920年には文部省の指定校となり、卒業生は無試験で医師資格が取れるようになった。

太平洋戦争中、吉岡彌生は愛国婦人会評議委

員，大日本連合女子青年団団長，大日本婦人会顧問などの要職に就き，多数の青年・婦人の戦争協力を指導した．そのため戦後，彼女は教職追放および公職追放となったが，1955年には勲四等宝冠章を受賞，死後には勲二等宝冠章を受賞している．郷里の掛川市には吉岡彌生記念館が設置されている．そんな彼女だから，治安維持法による検挙歴のあった塩沢を入学させるはずがなかった．

吉岡彌生に入学を拒絶された塩沢富美子は，やむを得ず東京薬学専門学校女子部に入学した．この学校の校長は，東京帝大医学部薬学科出身のクリスチャンで薬学博士の秋谷七郎（1896～1978）であった．後に東京帝大医学部教授となる秋谷は，塩沢の前歴を知っても驚かず常に彼女を守ってくれ，卒業時には東京帝大附置伝染病研究所に推薦状を書いてくれた．彼女はこの研究所で行なった「結核菌の多糖体に関する研究」で，戦後に東大から医学博士の学位を授与されている．

私の原稿では「学問の自由と科学者の社会的責任」という副題にもあるように，科学者の社会的責任に焦点を当てているので，時代背景があったとはいえ吉岡彌生校長については科学者として厳しい評価にならざるをえないわけである．



編集後記

2年間のJSA全国常任幹事の任期を終えたので、この間本誌の編集長を務めていただいた宮本氏の後を受けて、また編集長にカムバックさせていただいた。宮本氏には引き続き副編集長としてお力添えをお願いする。私は過去9年間編集長を務めているので新鮮味のない交代であるが、福井支部の重要な活動である機関誌活動を中断しないために頑張りたいと思っている。現在、支部機関誌を発行している支部は数えるほどしかない。その意味でも支部機関誌を継続している福井支部の活動は他支部からも高く評価されている。どうか引き続き『福井の科学者』発行するために、会員・読者の皆様のお力添えをお願いしたい。

今号には「ゆきのした史料館」代表の田島伸浩氏に、開館8年になる「ゆきのした史料館」の最近の活動と現状について書いていただいた。長い歴史をもつ「ゆきのした文化協会」が収集・保管してきた地方文化運動や平和運動の貴重な

資料・史料を、一般に公開し活用するために作られた「ゆきのした史料館」の活動は、地味ではあるが非常に重要な活動である。私も「ゆきのした文化協会」の会員の一人として、皆さまの支援と応援をお願いしたい。

有賀氏の報告は支部例会で話していただいたものである。われわれにとっても身近な九頭竜川と日野川の河川モニターとしての活動報告である。環境問題はもっとも関心の高いテーマなので、今後の活動についても引き続き注目していきたいと思っている。もし身近な河川の環境について気が付かれたことがあったら、有賀氏まで連絡していただきたい。

私の「大正デモクラシーと時代の雰囲気」は、現在2年後の出版をめざして執筆中の『近代日本の教育政策と科学技術体制 - 学問・思想の自由と科学者の責任 -』（仮題）の中の第3章に相当する部分で、数回にわたって連載の予定である。より良い原稿にしたいので、ぜひ忌憚のないご批判をお願いしたい。

(高木秀男)

福井の科学者	第110号	2009年10月15日発行
編集・発行	日本科学者会議福井支部 頒価500円	
連絡先	〒910-8507 福井市文京3-9-1 (郵送の場合) 福井大学教育地域科学部 680円 森 透 研究室気付	
	TEL 0776 - 27 - 8725	
	E-mail mori@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp	
	URL http://jsa.gr.jp/fukui/	

= 会員の著書紹介 =

書名 畜産物と健康 --卵・牛乳・肉の生産から考える

著 者 加藤武市 発 行 科学堂
発行年月日 2005 年 6 月 定 価 1500 円

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 第 1 章 長寿と食 | 第 6 章 我が国の農産物をめぐる諸問題 |
| 第 2 章 食生活の改善と長寿 | 第 7 章 食糧自給率は如何にして下がったのか |
| 第 3 章 畜産物の安全・安心を取り巻く課題 | 第 8 章 現在の食料を考える |
| 第 4 章 家畜の特徴 | 第 9 章 自給率の向上と食生活の見直し |
| 第 5 章 グローバル化での我が国の畜産経営 | |



福 井 県 医 療 生 活 協 同 組 合

〒 910-0026 福井市光陽 2 丁目 18 - 15 TEL (0776) 27 - 2318
FAX (0776) 24 - 8290

光 陽 生 協 病 院

〒 910-0026 福井市光陽 3 丁目 10 - 24
(0776) 24 - 5009

光陽生協クリニック

〒 910-0026 福井市光陽 3 丁目 9 - 23
(0776) 24 - 3310

光陽生協歯科診療所

〒 910-0026 福井市光陽 2 丁目 18 - 15
(0776) 24 - 8784

たけふ生協歯科診療所

〒 915-0805 越前市芝原 5 丁目 8 - 1 - 1
(0778) 22 - 5666

光陽訪問看護ステーション

〒 910-0026 福井市光陽 3 丁目 9 - 23
(0776) 24 - 9996

つるが生協診療所

〒 914-0123 敦賀市和久野 14 - 22 - 1
(0770) 21 - 0176

光陽ホームヘルパーステーション

〒 910-0026 福井市光陽 3 丁目 9 - 23
(0776) 24 - 9997

つるが生協在宅総合センター「和」^{なごみ}

〒 914-0131 敦賀市公文 1 - 6
(0770) 25 - 4311

HOPE

印刷のトータルプランニング

(有)ワープロセンターホープ

福井県越前市東千福町 21-4 / tel:0778(24) 1 1 4 6 / fax:0778(24) 2 3 3 9